小学生と英語教育

W校　高等部二年

押川　春香

近年、世界では急速にグローバル化が進み、様々な国の文化や物資が世界中を飛び回っている。それにともない、英語の必要性も日に日にまし、今では日本でも教育上必要不可欠な科目と化している。そのせいもあり、最近は小学校でも英語の授業は導入されているようだが私はこれに賛成である。

私が英語教育は小学生のうちから施されるべきだと思う一番の理由は、英語の能力というのは自分自身にとってプラスの要素になるからである。世界に出てビジネスをするにも、日本国内で働くにしてもそのメリットは大きい。例えば、実際に日本企業もトーフルに何点以上が欲しい、などの要求を出していると ころもあるし、英語能力が身についていることでのデメリットは何一つない。本格的な教育は中学校に入ってからでも良いが、小学生

のうちから英語に慣れ親しんでおくのは良いことだ。

早いうちからの英語教育が必要なもう一つの理由は、世界が広がるということだ。言語的な意味だけではなく、それ以外にも、英語圏での考え方や物事の捉え方を学ぶということも教育の一環になる。現実的に考えて、すべての子どもが海外に行き、その国の文化に触れる体験をするのは難しい。しかし、様々な観点や考え方が世の中にはある、ということを幼いうちからの英語教育を通じて知ることができれば、それは子ども達にとってプラスになるだろう。

例えば、私は十三年間日本に住み、その後二年間香港に住んだ後アメリカに来た。当然といえばそうだが、日本にいた頃、私は日本人としての考え方の中で生きていた。今思うと、日本人としての考え方とは、遠慮、思いやりなど、一歩引くということだ。しかし、私はアメリカに来てから、自分のことを主張

しないと生きていけないということを学んだ。今はどちらの考え方も自分の中にあり、それが自分にとって良いことだと感じる。

しかし一方で、小学生からの英語教育に反対という親は約三割にものぼる。その理由の一つに、どうせ中学生になれば学びなおすのに、どうして小学生のうちからそのためにわざわざ時間を割くのかというものがある。その答えは簡単だ。そもそもその二つでは教育目的が違うからである。小学生の英語教育は、文法を極めたり単語力を深めたりするのではなく、英語に親しんだり文化を学んだりすることにあると私は思う。語彙力などはつかずとも、小学生のうちから英語に触れることができる環境があるというのは子ども達にとって大きな財産になる。

このように、小学生のうちから英語教育が必要かということについては、大きく意見が分かれると思う。しかし、幼い頃から英語に慣れ親しむのは大切だということ、これから

の時代英語は必要不可欠であるという理由から、私は小学生からの英語教育に賛成だ。

「風の電話」～魂の浄化

LI校　高等部一年

山口　茜

岩手県大槌町の海を見渡す高台に白い電話ボックスがある。丘の草の色は茶色に枯れていて訪れる人は、みなダウンジャケットを着ていた。晩秋の丘は冷え冷えした風景だったが、その電話ボックスは、何かほっとするような暖かい場所に見えた。

ここに住む男性が、以前いとこを病気で失くし、悲しみをいやすために庭に置いた電話ボックスである。町の人は、「風の電話」と呼んでいる。私がこの「風の電話」を知ったのは、あるドキュメンタリーだ。気が付くと、涙がほほを伝っていた。

この静かな小さな町は、今も消えない深い痛みを抱えている。二〇一一年三月十一日に起きた東日本大震災で千二百人の命が奪われた。普通の暮らしの中で、突然おそってきた大地震と津波に自分の家族の命を奪われた

人々は、どこに自分の怒りと悲しみをもっていけばよいのか、答えは誰にも分からなかった。

「風の電話」は、家族や親しい人を失くした人が、あの世にいる人とつながるための場所だ。残された人が固くふたをしていた自分の心を開放する場所、言葉なき声をあげる場所だ。家族への想いは、風にのって伝わる。

長男、長女、次男三人の子供と暮らすお母さんがいた。トラックの運転手のお父さんがたまたま仕事のシフトが変わってこの場所で命を失った。お母さんは、明るくて気丈な女性だ。１５歳の長男は「お父さん、なんでお父さんだったんだ。なんでぼくだけなんだ」と父親を亡くした行き場のないつらさを吐き出していた。あの日以来、家族は父のことを完全に口に出さなくなっていた。お互いに気遣って語れなくなっていたのだ。しかし「風の電話」の前で、完全に口を閉ざしていた次女は、「今アイドルにはまってるんだ、お父さ

ん」と語りかけ弟と初めて泣きくずれた。お母さんは、「何度も死のうと思ったんだよ」と語りかけた。

どんなに元気にふるまっていても、悲しみを感じさせない人でも、心の中で、喪失感とこれからの不安と戦っているのだろう。

六十代くらいの女性が、昔ながらの黒い電話のダイヤルを回す。受話器を耳にあてたまま何もしゃべらなかった。けれど、きっと亡くなった夫に思いを伝えていたのだろう。

年配や中年、若い男性が多く意外だった。人それぞれの状況は異なるけれど、家族へ伝えた思いは、みな同じだった。「元気？私も子供たちもなんとかやってるから心配しないで」ということだった。一般に、日本人は悲しみや家族への愛を言葉であまり表さない。けれども「心配しないで」という家族へのメッセージは、まさに「愛」だった。

私は、「風の電話」ボックスから出たあとの人の表情が変わっていることに気がついた。

亡くなった家族の返事が返ってくるわけではない。でもここを訪れた人は、少しだけ心が解き放たれたのではないだろうか。喪失感が無くなるわけではなけれど、死んだ妻や夫、息子、娘、父や母に語りかけることで魂は浄化されるのかもしれない。そしてそのことは、残った人がこれから前を向いて生きていくのに必要なプロセスであり、力を与えてくれるものではないだろうか。

「風の電話」は、一見ふつうの公衆電話に見えるけれども、あの世とこの世をつなぐ大切な役割を果たしているのだ。

「故郷」

L工校中三　大宮　周磨

私の故郷はニューヨークのマンハッタンです。私はこの街で生まれ、育ちました。ニューヨークは私にとってとても住みやすい街です。仲の良い友達もいて、小学校からの友達もいます。ニューヨーカーは優しくて、親切です。私はニューヨークが好きです。「故郷」というこの作文の題はいつか私が大人になり、ニューヨークを離れて、その何年後かにまた、このニューヨークへ帰りたいと、思う日が来るのかもしれないと、周辺の「故郷」を読んで思ったからです。周辺の「故郷」の主人公は故郷に帰り、悲しい現実に直面します。私もこの主人公と同じように、いつか故郷へ帰った時、悲しい思いをするのでしょうか。故郷は一体、どうなっているのでしょうか。

私は今16才です。高校を卒業して、大学へ進む時私はもしかしたら遠い所へ行くかもし

れません。二十年近く住んだ所を離れるのは寂しいし、少し恐いと、感じると思います。友達はわかりませんが、父と母はたぶん日本へ帰ると思います。私はたぶんアメリカのどこかにいると思います。もしかしたら、ずっとニューヨークにいるかもしれません。

私の故郷はずっと変わらないのでしょうか。時代や社会が変わっていくのと同じ速さで私の故郷も変わっていきます。私も変わります。皆、変わるのです。変わらない物はきっと過去の思い出だと思います。過去し故郷でいい思い出を持っている人達は又、故郷へ帰りたいと思うと思います。「進撃の巨人」という漫画の中に出てくる兵士たちは故郷へいつか帰るという希望をはげみに巨人と戦います。故郷はたいていの人にとって心を優しくしてくれる場所です。それはいい思い出があるからだと思います。

「いい思い出。楽しいとか、うれしいとか、

悲しいとか、きれいだとか、すなおに感じることが今はできます。だから、私は今たくさんいい思い出があります。でも、大人になったら、今、楽しいことも、うれしいことも、そうではなくなるのでしょうか。私は今のままの気持を努力すればずっと続けられると思います。たぶんとても難しいと思いますが。

では、大人になるとはどういうことなのでしょうか。大人になるとは体が大きくなるというだけでなく、精神的に成長するということだと思います。自分の意思や欲求をおさえることができるようになることだと思います。言いかえると、本心をかくせるようになるということだと思います。自分の気持に正直でなくなっていくのが大人になることなら、それはとてもつまらないことだと思います。がまんをするということなのでしょうか。それがき。と社会でうまく生きていく、やりたんでしょう。いつか私も大人になったら自分の気持を正直にあらわすことができなくなる

のでしょうか。私はそうなりたくありません。
が、色々な人達とうまくやっていくにはそうしなければいけないのでしょう。
最後に、魯迅が「故郷」の中で言っていた「希望」とはいったいどういう意味の希望なのでしょう。それはたぶんこの世の中がお金によって動いていて、お金のある人とない人との間に壁をつくるのだと思います。子どもの頃にはなかった壁が大人になって仕事をするようになると、はっきりして自分が社会でどの位置にいるかわかるようになるのだと思います。魯迅は大人になった時にわかる、この社会での地位を忘れて、純粋な心をうちあけ合うことのできる人達になってほしいと思っていたのではないでしょうか。故郷へ帰った時、私はこの「希望」をかなえられるでしょうか。私はまだわかりません。でもその「希望」をかなえられたらいいと思っています。

20×20

苦い思いの裏側

W校　中等部二年一組
武田　悠里

まぶしい太陽の下で、ゴールのネットがふわりと揺れた。ここは、ロングアイランドにある施設。私達は今、外のデッキで試合をやっている。今日は、私達の方が優勢だ。ステイックを持つ手に力が入った。試合が終わると、芝の上でトレーニング。これは、私の一番好きな時間だった。難しいことや変な動きも、みんなと頑張れるのが嬉しかった。キャンプにいるのが実感出来る場所であった。

私はスポーツが嫌いだった。体育の授業では活躍出来ず、足も遅くて、成績もあまり良くなかった。

そんな私がホッケーを始めてみようかなと思ったのは、六月の事だった。その頃には弟がホッケーをやっていて、私と妹はフィギュアスケートをやっていた。そして、毎日のようにテレビでプロのホッケーの試合を観てい

た。そのうちに、面白いなと魅せられたのも一つだ。それを奮い立てたのは、父の言葉だった。

「ホッケー始めてみたら？夏のキャンプにも参加出来るから。」

しかし、すぐには決められなかった。そんなに簡単に始められるものなのか。運動音痴の私が出来るのか。迷った末、やってみることにした。

素人の私にとって、キャンプは苦労の連続だった。やったことのないものをいきなりやらされて、しかも他の人達は出来て当然だと思っている。そんな中で試合をやるのは辛かった。暑い太陽の下で、仲間が攻めている。なのに、一緒に攻める勇気がない。パスを取れなかったらどうしよう。シュートを外したら大きな恥だ。攻撃は出来ないから、せめても守備につき、相手からボールを奪ったり邪魔をしたりして少しはチームに貢献しようと努力した。何度かボールを奪って仲間にパス

を出した。でも相手は強く、どんどんゴールを決める。何だか気まずくて、ベンチでもうつむいている他なかった。気がつくと、太陽が陰っていた。試合が辛いのは氷の上でも同じだった。どのように邪魔をしたら良いのか。なぜ手が出ない。まだ激しい戦いに慣れていない中、自分から突っ込むのは至難の業だった。それは試合の半分に来たところだったか。相手が攻める中、ゴールの前にいて邪魔をし ようとしていた時だった。パックを持った人が、私の死角にいた、ゴールの横にいた人にパスを出した。

「あ、ゴールされる」

と振り向いた時にはもう遅かった。ネットが、まるで嘲笑うようにふわりと揺れた。目の前で敵チームが喜び合っている。唖然としていると、シフトの交代の合図であるブザーが鳴った。私の出番は終わりだった。ゲームが終わった時は、かなりショックだった。五点差で負けたのだ。ロッカールームに戻る私のチ

ームメイトの足取りが、重かった。
女子用のロッカーにはまだ誰もいなかった。チームを表すジャージーを脱いで、リンクをこっそり覗いた。敵チームが、優勝カップを持って笑っている。何で負けたんだろう。今までは勝っていたのに。そう思っているうちに、涙がにじんだせいか、敵チームの人達がぼやけて見えた。
外でのトレーニングや試合が終わると、着替えてリンクへ出る。それがいつものスケジュールだった。私は氷の上が好きだ。滑っていると、何だか嫌なことを忘れられるような気がした。ある時、四対四でチームに分かれてリレーで戦ったことがあった。その時私はアンカーになってしまったのだ。自分が勝負を決めるんだとドキドキしながら、自分にバトンが回ってくるのを待っていた。三番目の人が近くなってきた。バトンをしっかり受け取り、ぐっと握りしめた。あとは涼しい風を受けながら、全速力で滑走した。相手のチー

ムのアンカーが、横目で見えた。チームのみんなが応援してくれているのが聞こえた。もう少し！。心臓が張り裂けそうになったが、必死に滑った。ピピーッとホイッスルが鳴った。私は慌てて止まった。しかし、嬉しくてたまらなかった。恥ずかしいから、心のなかでだけガッツポーズをした。私達は勝ったんだ。今まで感じたことのないような達成感が湧いてきて、チームメイトとハイタッチを交わした。

キャンプはあっという間に終わってしまった。さよならをするのには抵抗があった。帰りの車で親に、

「キャンプどうだった？」

と聞かれたときに、

「楽しかったよ。また行きたい！」

と答えた自分に驚いた。なぜこんなことを言ったのか。と同時に、どうして辛いことや悲しいことも、最後には「楽しみ」に変わるのだろうかと思った。このキャンプを終えて、

答えが見えてきたような気がした。辛かったことでも、悲しかったことでも、楽しかったことでも、全ては貴重な思い出に変わるから。辛いという字は、もう少しで、幸せになれそうな字である。色々な事を学んだキャンプであった。

成長するための別れ

NY補習授業校　中等部　二年一組

ハナガン　すかいら

私には三人の姉妹と、二人の弟達がいる。六人兄弟の私は三女だ。幼い時より、私達兄弟はいつも一緒にいる存在だった。思い出す家族の風景には、誰かがいつも私のそばにいた。例えば家族で小旅行といっても、車一台に八人が乗るわけなので、後部座席はいつも誰かが騒いだり、喧嘩をしたり、泣いたり、すねたりと全く大変である。他にも兄弟と一緒に同じ習い事をしていたので、家では同じ話題でよく盛り上がったものだ。一緒に冗談を言い合ったり、ふざけあったり、姉、弟、妹達が私の話を聞き、そして私も彼らの話を聞く。話題に絶えることがなく、誰かがいつも何かの話をもってくるのである。あなたの家はとてもにぎやかでしょう、とよく言われるが、私にとってはそれが日常なのだ。別な風にいうと、にぎやかでない日常は私の家で

はないのだ。

そんな中、今からちょうど一年程前になるが、私がどっぷり頼りきっていた長姉が、大学進学のため、家を出た。何でも話し合える姉が、ある日を境に家族から離れていったのである。

私には年下の兄弟が三人いる。そんな私にとって、甘えられるのは姉達の前だけだった。下の兄弟の前では「お姉ちゃん」を演じなければならない。しかし姉達の前では学校のこと、友達のことをはじめ、親にも言えないことなどをよく聞いてもらったものだ。姉達と話をしていると自分が自分らしくいられるのがよく分かった。

姉が遠くで寮住まいすることになった時、私は姉を「失くした」、そんな気持ちになってしまった。とても寂しく、悲しかったのだ。まるで自分だけがぽつんと置いていかれたような、そんな気持ちになったからだ。来年はもう一人の姉も大学へ行くことになっている。

そうなると家の中では私が一番年齢が上の子供になる。そうしていくうちに、私もあと数年すると家を出て、その次は下の弟、そして妹となる。最後はもう家には親しかいないことになるのだ。

このように私達は皆一人ひとり、自分達の道に向かって進んでいくことになる。私達兄弟は、皆離れ離れになっていく。こんなことを考えてしまうと、それだけで大変辛く、いつまでも姉、弟、妹達と出来るだけ長く一緒にいたいという気持ちに駆られる。

しかし私は分かっている。ずっと今のままでいても何も変わらない。誰も成長しないのだ。いつか家を出て行くのは、想像するだけでも怖くて不安だが、そうすることで私達は皆成長していくのだ。

母さん

L I 校　初等部　六年一組
畑崎優里

私の家では、二匹のねこを飼っています。

名前はアンディーとパンディーです。五年前の五月に裏庭で生まれました。

お母さんのねこは、のらねこで、アンディーとパンディーが生まれる一年前くらいから、うちの裏庭や近所の裏庭をうろうろしています。

サをあげてかわいがっていました。

穏やかで人なつこかったので、時々エ

とのお母さんねこのお腹がどんどん大きくなって、赤ちゃんがもうずく生まれることはわかっていましたが、まさかうちの裏庭で生むとは、思っていませんでした。台所にいた母が、ミャーミャーと鳴く子ねこの声を聞き、外に出てみると、木の根元に四匹の生まれたばかりの子ねこが、並んでいたとうです。四匹のうちの二匹を、知り合いの人が飼うことになり、残りの二匹をどうしようかと言う

ことになりました。

父があまりねこが好きではなかったので、

母が何とか説得して、二匹飼えることになり

ました。お母さんねこは、相変わらず裏庭に

エサをもらいに来ましたが、お母さんねこも

家の中に入れてあげたかったですが、三匹飼

うのはどう考えても無理です。」と母さん」と

言う名前をつけて、遊びに来た時はエサをあ

げたり、かわいがったりしてました。

イーは大人のねこになりました。その間、母

さんは、しばらく来ない期間があって心配し

たり、また来るようになったり、けがしてび

っこをひいて来たりしました。少し前には、

かわいい首輪をつけて来たりして、母と姉と

「だれかに飼われたのかな、よかったね。」と

詰していました。

今年の春は、ほとんど毎日うちの裏庭に遊

びに来て、ドアの前にすわって待っていまし

たが、ある日を境に来なくなり、一ケ月が経

20×20

ちました。母と私は心配しましたが、なるべく悪いことは考えないようにしました。

とんな時、家の近くで一枚のはり紙を見つけました。「ねこを探しています。」のはり紙でした。

どきどきしながら文章を読むと、ダブドいう名前がつけられていたこと、放し飼いでしていたが、一日のほとんどをとの飼い主の家の中で過ごしていたこと、飼い主が一生けん命探していることがわかりました。

いなくなった時期が、うちに遊びに来なくなった時期と同じなので、やはり行方不明なんだと思うと心配でしたが、ずっとかわいそうだと思っていた母さんは、飼い主に愛されて穏やかで幸せな日々を過ごしていたことを知り、何だか嬉しくなりました。

お腹がすいて毎日うちに遊びに来るのかと思っていましたが、とんな満たされた生活の中で、ふと子迷達に会いたいと思い、ドアの前で待っていたのかを知れません。

母も母さんがとの後どうなったのか知るのが怖くて、はり紙の主には、連絡していませんか。かわいくて優しいねこだったので、またしばらく過ぎだれかの元でかわいがられて、のんびり暮しているのだと思っていました。

アンデーとパンデーは、とんなこともあったのか知らず、母さんに似たまん丸い目で、今日もガラス戸から裏庭をながめています。

僕とビーハイブ

渡邉慧

僕は怖がりです。とくに危険な山道などは、絶対に行きたくないです。これはある山での経験です。

僕は今年の夏、家族とみんなでメイン州に旅行へ行きました。アーカディア国立公園を見に行ったのです。

アーカディアは、アメリカにある五十九個の国立公園の一つです。家から車で約八時間かかりました。高さが千フィート以上の高くそびえる岩山がいくつも連なり、水がないと思うぐらいの透明な池もありました。ムース、ハクトウワシ、イースタンコヨーテなどの動物もいて、鳥の種類はなんと三百種以上もいるそうです。ハイキングの他にも水遊び、自転車、カヌーイング、ホエールウォッチングなどもできるのです。

僕達は、いくつもの山を登ったり、船に乗って近くの島に行ってみたり、自転車で国立公

園内を走ったり、色々な事をしました。中でも僕が一番思い出に残ったのはあるトレールでの経験です。

到着してから二日後、父が僕にこう言いました。

「オレとビーハイブに行かねぇか？」

一瞬僕は、冗談だと思いました。

国立公園内にはとてつもなく危険なトレールが二つあります。ビーハイブトレールとプレスペストレールです。この二つのトレールでは、これまでに、死者が出たことさえあるのです。なぜ危険なのかというと、急な崖や岩道が続いていて、少しでもミスをして、足をふみはずしてしまうと、あの世へ行ってしまうからです。さくやガードなどは何もなく鉄のはしごを登る所もあります。

「あのビーハイブトレール？死者が出たあの危険トレール？無理無理無理無理」。そう僕は心の中で思いました。「だけどこれは一生に一度しかないチャンスかもしれない」。もし

かしたら、自分の弱点の怖がりを克服できるかもしれない。でも死にたくない！僕は悩みました。そして僕は決めました。

「行く」

トレールの入り口では色々な人達が困ったような顔や心配そうな顔をしながら立っていました。

僕はお父さんと一緒にビーハイブトレールに入っていきました。その時の僕の緊張感はすごかったです。数分間登って行ると、いかにも落ちて死にそうな崖を見つけました。だけど僕は絶対にこのトレールの終わりまで登ると決心をしました。勇気を出して、注意をしながら、崖を登って行きました。そんな危険な崖や岩道が何面もあったけど、すべて突破して、やっと頂上へ着きました。頂上での景色はとてもきれいで、どこまでも続いているような毎と森、そして青い青い空は素晴らしかったです。

ビーハイブを通して自分の弱点を乗りこえられたような気がしました。さらに大切な思

い出もできました。

考えてばかりで自分の限界を決めてしまっていたけれど、ビーハイブを登ってからは、自分の限度がだんだんと広がっているような気がします。大きくなって、またアーカディアに行ったら、今度はもっと難しいプレスペストレールに挑戦してみたいと思っています。

20×20

サイレンの夜――人の役に立つこと

五年一組　井手諒

「カキーン。」

ピッチャーの速球をバッターが打ち返しました。その球は新幹線のような速さでぼくの友達が守備していたところに飛んでいきました。つぎの瞬間友達の方を見ると、友達は泣きながら倒れ、動かなくなってしまいました。ボールが顔に当たってしまったようでした。コーチや両親達があわててかけよってきて、すぐに救急車を呼びました。少し後に救急車がサイレンをならしながらやってきました。

その日は、ぼくはいつものようにサッカーの練習を終えてから、兄の野球の試合を見に行きました。最後の回までは何ごともなくふつうの野球の試合でしたが、最後の回にその事件が起こったのでした。

その友達のお母さんはアメリカへ来たばかりだったのであまり英語をうまく語せませ

20×20

んでした。そこで母は兄に通訳をするように言い、ぼくは病院までついて行くことになりました。通訳をするのはふつう大人がやることだと思っていたので、子供がやるなんて最初びっくりしましたが、母に

「いい経験になるよ、さぁ行きなさい。」

と言われ、ぼくと兄は不安ながらも「はい。」と答えました。友達はホワイト・プレインズ病院まで救急車で運ばれ、兄は友達のお母さんの車、ぼくは母の車に乗って行きました。病院では友達がストレッチャーで運ばれていきました。ぼくはストレッチャーで運ばれている人を見たのは初めてでした。まるでテレビドラマの場面のようでした。ぼくは「これはとっても特別な日だ。母が言ったとおりだ。」と思いました。友達は救急病棟に入ってゆきました。

兄は通訳として病院の人の質問の通訳して友達のお母さんに伝えました。免許証、住所、職業などを聞かれました。ぼくは兄が通訳し

20×20

ているのを見ているだけで気が楽になってきました。知らないうちに、笑顔がぼくの顔にできていました。

ひと通り通訳が終わった後、友達のお母さんからもぼくの母も、家に帰ったら父からも兄とぼくはほめられました。でもよく考えてみれば、ぼくは兄についていっただけで通訳したわけではありません。母はこう答えました。

「通訳という主役をつとめたわけではないけで、荷物を運んだり、自分でできることを見つけ、ちゃんとやった。うちの家族みんながついていたことで、友達のお母さんも心強かったと思う。」

その時ぼくは気がつきました。その場でもう家に帰れたかもしれません。兄だけ行けばすんだかもしれません。けれどぼくは自分ができるベストのことをして、きっと周りの人を安心させることができました。それにぼくは、兄のかつやくを見て、自分が持っている

20×20

能力を使って人助けすることがどれだけすばらしいことか学びました。

一週間後、友達は完全に回復して何ごともなかったように元気に試合に出ています。その姿を見るたびに時々あの日のことを思い出します。

20×20

自然と命

L工校　四年二組
槇原　尚紀

この夏、初めてとまりがけのキャンプに参加しました。ニューヨークアップステートのキャッツキル山地の自然がいっぱいある中で二週間すごしました。そこで自然と命についてたくさん考えました。だから、その事について書き残したいと思います。

キャンプにいる間、何度か命を強く感じました。まず、キャンプに着いた時です。車からおりろと大きな森が広がっていてぼくはおどろきました。数えきれない木があって、た

くさんのせみの声がスピーカーを使っている様に、大きな音でいろんな所から聞こえました。何千びきもいそうでした。せみは長い間地下に住んでいたので、地上に出てこれたのがうれしくて、一週間だけど思い切り鳴いて死んでしまいます。ぼくも、せみみたいに大きな声でさけびたくなりました。その時、命を強く感じました。

自然と命を強く感じた二つ目の時は、湖で泳いだ日です。ぼくは早く泳ぎたいと思って、ざぶんといきおいよく水に飛びこみました。水に入ったしゅん間、心ぞうが止まるかと思いました。体がカチンと氷のように

にかたくなりました。こんな冷たい水の中で生き物達は、どうやって生きているのだろう。ふしぎだなあと思いました。でも答えは、すぐわかりました。泳ぎ始めると、体がぽかぽかと暑くなったからです。あぁ、こんな具合に、泳ぐと体の温度が上がるんだ。その時、ぼくの命と湖に住んでる生き物達の命と、そして湖全体の命まで感じました。

最後に、自然と命を強く感じたのは、新しくできた友だち達と森でわた日です。森は、真っ暗やみでした。木がたくさんあるから月の光がとどきません。自分の手が見えない位の暗さです。ぼくはねる前に、ちょっ

とだけ散歩をしました。静かな森の中で、世界の森の事を考えました。人間は、世界中の森林を自分の物にしています。木を切ったり、道路をしいたり、町を作ったりして、他の生き物達のい場所をうばっていきます。そして、い場所のなくなった生き物達は、どんどん小さい所に追われていき、やがて、死んだりぜつめつしたりします。でも、フロストバーレーでは、せみや魚以外にもたくさんの生き物がいると思いました。この時、自然と命を強く感じました。

こうして、キャンプで何度も命を強く心に感じました。そして、ぼくは、フロストバーレーのような森林

命あふれる自然を、世界中にふやしたいと思います。

16×16

目指せヴィーナス

W校　四年二組　武神　恵実

「アウト」

相手ははげしいつっこきゃうをしながら、人差し指を天じょうに向けて言った。わたしは、ネットに行ってあく手をした。顔は笑っていたけれど、本当は泣きたい気持ちをこらえていた。なぜなら、完敗したからだ。

わたしは、テニスキャンプに行く前は、友達と遊ぶ方がいいと思っていた。二年前、このキャンプに行ったことはあまり気おくにのこっていない。けれど、毎朝コート四面を二周走るのがつらかったことは、はっきり覚えていた。

16×16

キャンプでは、走った後、さらにストレッチやエクセサイズをして、それだけでつかれはてた。それからやっとテニス。キャンプはふつうのレッスンよりもいっぱいボールを打つし、前後にもっと動く。外のもえる太陽の下でゲームをするとき、楽しいというよりは、つらかった。

その週の水曜日、いつも通りドアをくぐった。回りを見ると、みんないつもよりキャンプが始まるのが待ち遠しそうだった。でも、それは気にしなかった。いつものように走ってエクセサイズをした後、コーチが言った。

「今日はトーナメントをするよ。」

16×16

そして、わたしとエマに、
「コート四に行って試合をして」
と言った。わたしとエマはうなずいてコート四まで行って試合を始めた。
わたしはエマは同じくらいのレベルだと思っていた。けれど、それはちがった。十一対三で負けたのだ。そして、そのトーナメントではなんと六人中五番だった。
木曜日のキャンプの後、母が、つかれ切っていたわたしに聞いてきた。
「もう一週間申しこんでみる。」
わたしはちょっと考えてから言った。
「友達と遊びたいから大じょうぶ。」
その夜、そのことを考えていたら、友達とは午後遊べるし、トーナメン

トのことがとてもくやしかったから、次の日の朝、母に言った。

「やっぱり申しこんでみたい。」

月曜日、キャンプが始まると、先週よりもずっと上達しているのに気づいた。火曜日の夜、次の日にそなえて早目にねた。水曜日、キャンプに着いたら、今度はわたしも楽しみにしている一人だった。いよいよトーナメントが始まった。

最初は、自分よりも上手だと思っていた子と対戦したけれど、勝って自信がついた。次もかん単に勝ったから、油だんしたのか、三回戦目は苦戦した。デュースでギリギリ勝った。次からは気を引きしめた。それ

がよかったのか、次は十一対一であっ
勝した。そして決勝戦。マッチポ
イントをむかえた。あせがぽたぽた
と流れていた。ここから、相手にポ
イントをたて続けにとられてデュー
スになったらどうしよう。わたしの
頭の中でそんな事がぐるぐると回っ
ていた。
「アウト」
しかし、今度はわたしが言う番だっ
た。その子は先週負けた相手だった。
飛び上りたいほどうれしかったけど、
心の中のどこかで、相手がかわいそ
うだと思うわたしもいた。
それでも、トロフィーをもらうと
最高に気持ちがよかった。少しして、

USオープンをみに行った。そこでヴィーナスウィリアムズの試合をみた。いつかわたしもヴィーナスみたいに大ぶ台でかがやきたいと思った。

ぼくと和馬

L工校三年一組

クラーク将人

和馬は、ぼくの弟です。どうして和馬の事を書こうかと思ったかと言うと、和馬にはにくたらしい思いや楽しい思いがあるからです。どういうけんかをするかと言うと、和馬がぼくの使う物をぜったいにとりたがったりいてぼくはおこります。ぼくが和馬のいやがる事をすると、和馬がぼくのことをすごいきおいでなぐります。けれども、ぼくはなぐり返しません。どうしてかと言うと、ぼくはやり返すとだめだと思とからです。ぼくにもあるい所がありますす

弟が妹と本を読んでいる間、ざけたりすることがあります。ぼくがそうすると、和馬がおこって、読むのをやめてみなもおこります。本当はぼくはそれを、しない方がいい、と思います。ぼくがわるいことをすると、わるいよな、と思うのでたまにごめんね、と言うときもあれば知らんぷりして言わないこともあります

けんかばかりに聞こえますが、和馬がいないとできないことがいっぱいあります。たとえば、ぼくが外で遊びたい時などは、和馬がいないとぼくはさみしくなるのです。だから和馬おいでよ、とよんで、まって、と言う声が聞こえるとほっとします。

あとは、ぼくがパズルをしている時和馬はあっと言う間にピースを見つけることができるし、紙ひこうきを作るのがとても上手だから、ぼくはかっこいい紙ひこうきで二人て遊ぶことができます。でも和馬がぼくと遊びたくないときは、ぼくがおこって和馬がいやがることをしてお母さんにおこられるのでぼくはそれをやめようとしますが、どうしても和馬と遊びたくてもうたまらないのでやめることができません。和馬がいなければぼくの人生がまるですごくつまらなくなると思うので、ぼくは和馬がいてよかったと思います。こういうこともあります。ぼくがかなしい時

16×16

そしてさみしい時は、和馬はぼくの所に来て、ぼくに、どうしたの将人とぼくがうれしくなるようなことをします。たとえばおもしろい顔や、おもしろい話をしてきたりして、ぼくをわらわせるのです。和馬がいないとできないことがすごくいっぱいあります。だからかみさまがくれたプレゼントなんだと思います。

ぼくは和馬とけんかしていてもしてなくても、いてよかったなと思います。ぼくとどんな時も遊びたい人は和馬しかいないかり和馬は大事な人です。ぼくはたまにどうしてこんなに和馬とけんかするかを考えてみるのですが、ぼくはどうしてかにつ

16×16

いて答えを見つけたことがありません。ぼくは自分が、和馬のことをじまんするからだと思います。和馬はぼくの一番の友だちなので、そういうことをやめないといけません。ぼくは本当に和馬のことが大すきなのです。

レバノン銀山に行ったこと

W校　三年二組

後とう　葉り子

私は八月に家族とコロラド州のジョージタウンにあるレバノン銀山に行きました。レバノン銀山は千八百七十年代から千八百九十三年まで使われていました。一番長いどうくつは三百六十六メートルもあります。銀山までは、じょう気かん車に乗って十分ぐらいでした。そこまでの道のりは、山でかこまれていて、そのうちの高い山の一つは、むかし銀山で仕事をしていた人たちの村があったそうです。

私がレバノン銀山のガイドツアー

にさんかして心にのこったことがニつあります。

一つ目は、銀のとり方についてです。むかしの人はハンマーとのみを使ってほり、一日ニセンチメートルほどしかすすみませんでした。そして何年かたつと、新しいきかいができて、そのきかいを使うと一日に前の倍い上の五センチメートルほることができるようになりました。しかし、そのきかいは、いにわるいので、使い始めてから五年しか生きられなかったそうです。それでもそのきかいを使い続けた理由は、たくさんほることができるのでおきゅうりょうがタタくなり、自分がしんでしまったがったからです。

後、家にお金がのこっていればいいと思う人がたくさんいたからです。

もし私のお父さんが銀山ではたらいていたら、お金がなくてもいいから、長生きしてほしいです。なぜなら、私の家族はお父さんのことが大好きで、ずっと一しょにいたいからです。

そして二つ目は、両親がいない子どもたちがダイナマイトをはこぶということです。なぜ両親がいない子どもかというと、その子どもがしんでしまうかもしれないからです。その子どもたちのことを「パウダーモンキー」とよばれていたのかというと、「パウダー」

はダイナマイトのことで、「モンキー」はせまいどうくつの中でもさるのように早く走ることができるからです。このせつ明の前に、ツアーガイドのお姉さんがとつぜん、

「子どもは、このはこをもって。」

と言ったのではこを持って、せつ明を聞いていました。するとさい後に、

「この中にダイナマイトが入っているよ。」

と言われて、びっくりしました。本当はにせ物だったけれど、こわかったです。私が、この仕事をしてくださいと言われたら、両親もいなくて、にげる所がないから、こわいけどはこびます。きっとむかしの子どももも

同じ気持ちだったと思います。

むかしの仕事は、今だとしんじられないやり方をしていたのだと分かりました。びっくりするような話しが聞けておもしろかったです。

16×16

かぶと虫とよう虫

W校　二年四組

今村暢浦

今年の夏休みに、おじいちゃんの家に行きました。そこで、ぼくと四才の弟と家ぞく五人で、かぶと虫をかいました。友だちの家にかぶと虫がたくさんいたので、オスとメスを一匹ずつもらいました。その前に、お父さんとおじいちゃんが

土とかごを買ってきてくれました。はじめてかぶと虫を見た時、思ったより大きくてとてもうれしくなりました。毎日楽しくかんさつをがんばりました。かぶと虫はフルーツこん虫ゼリーが大こうぶつです。とてもカがつよいので、一回がらにげ出しました。オスがつのをつかってふたをこじあけてにげたのだと思い

ます。メスはオスより小さいです。そして、たまごをいっぱいうみました。白くてニミリメートルくらいのたまごが十七こありました。中からよう虫がすけて見えると、とても元気なよう虫が生まれました。土をいそがしそうに食べたり、いそいでもぐったりしていました。とても白くて、びっくた。

りしました。本で読んでいたので知っていることも多かったけれど、本当にかってみると色いろなことがわかって楽しかったです。アメリカに帰るまえに、友だちにたまごニつと、よう虫一ぴきをあげました。とてもよろこんでくれました。友だちも楽しくかんさつして、がんばってそだててほしいと思いました。今はか

ぶと虫は日本においてある
ので、おじいちゃんとおば
あちゃんがかってくれてい
ます。らい年には元気なが
ぶと虫に会いたいです。

空手

W校二年二組

山崎フィッシャー和

ぼくは空手をならっている。小さい時に上海で力ソフーをならっていた。

今、ぼくのベルトは青だ。はじめは白、つぎは黄色、オレンジ、むらさき、青、青に糸泉、みどり、みどりに糸泉、糸泉、ちゃ色、ちゃ色に糸泉、糸泉、ちゃ色にそしてく

ろになる。

もっとたくさんれんしゅうしてくろだびになりたい。

春にトーナメントがあった。

ぼくはたくさんれんしゅうしてフィーは大きかった。

来年は一いをとりたい。

ぼくのおとうさんから、

ニナニナ年の東京オリンピックで空手をやると聞いた。

東京オリンピックをぜひ見

に行きたい。

それから、ぼくとお父さんはベルトラックを今っしょに作っている。後はニスをぬったら終りだ。ベルトラックにゼッケンの色のベルトをつけたい。

ベルトの色がぜんぶ同じになったらくろおびだ。

お母さんが、つくろおびになったらオリンピックに出られるかもしれないと言っていた。

だ。

ベルトテストにうかると次のベルトになる。上のクラスのベルトテストは、空手をする前に運動をする。空手の時には一かれている。だけどがんばってやるのがむずかしい。

ぼくは毎週二日れんしゅうに行く。おとうとのかいも行く。かい君はオレンジベルトだ。

二人でたくさんれんしゅう
してくろおびになって、
オリンピックの空手のせん
手になりたい。

ゆめがかないました

町田美香

二年まえのある日、パパがらお正月をすごしてはるごろにアメリカのニューヨークにてんきんするときまし た。「アメリカ？ニューヨーク？てんきん？」というようなことなのかわたしはわからなかったのでおしごとでひっこしすることがてんきん

だよとパパがせつめいしてくれました。しらないところへひっこしするなんてとてもしんぱいになりました。一ばんいやなのはようちえんのともだちとあえなくなることでした。

ながいあいだひこうきにのってわたしたちはニューヨークにつきました。さいしょのころはともだちにあえなくてさびしかったですが

よくおチがみとアルバムをながめてしくしくないていました。しばらくしてからアメリカの学校がはじまって、いそがしいまいにちになってきました。あっという間に二年がたちました。

ことしのはるにパパがなつは日本の小学校にいこうといいました。それをきいてまた日本のともだちにあえるー！とうちゅうまでとべ

るぐらいうれしかったです。

いよいよむかしのともだちにあう日になりました。

なん人かがおひさしぶりー！と、

いってくれました。ほとんどのともだちがみかのまえをおぼえてくれて、とてもうれしかったです。そのあとみんなとーしょにちかくのこうえんであそびました。

そこはようちえんのとなりにあるむかしみんなときい

にちあそんだこうえんです。
おなじともだちとおなじあ
そびをして二年かんずっとで
したかったことがやっとで
きました。わたしのゆめが
かないました。

ぼくとおかあさん

W校一年四組

おかあさんは、けいとうけいです。

ゆくだいをしているときにぼくがすきなうたをかけてくれます。「ふるさと」と「ウ(エ)ンユ(ー)ウィッツ(ィ)ツ(ッ)ュア(ッ)ー」です。ほかのいいスタートゥウィッツ(ィ)ツ(ッ)ュアップ(ッ)オンアのときもかけてくれます。そうしたら、すらすらしの

ゆくだいができるからたのしいです。

おかあさんは、いっしょにあそんでくれます。カーゲームをしてくれるのがいつも、いちばんたのしいです。ちがかつのか、たのしみです。まけるとくやしいから、かつまでやりたいけど、しゅくだいやめます。

いや、ねるじかんになっちゃうからやめます。

そしておかあさんは、
「しょにねてくれます。ねるまえには、本をよんでくれます。おかあさんと、
しょに本のことばやえを見られて、たのしいです。
でも、おかあさんは、ぼくがしゅくだいをしないと、おにみたいにおこります。
おかあさんがおこるとぼくもおこりたくなります。でもぼくがおこりかえすと、

おかあさんがもっとこわくなるからやめます。ぼくは、おかあさんのことをあまりおこらせたくないな、とおもいます。

ぼくは、ずっとおかあさんといっしょにあそびたいです。これでぼくとおかあさんのおはなしをおわりにします。

二ねんせいになって

Lエ校一ねんくみ

山本るい

ぼくは、九月に二ねんせいになりました。クラスは十九人います。男の子が十人で、女の子が九人います。クリスチャンとおなじがよかったけど、ちがいました。かなしかったです。でも、ダリオとおないクラスだったから、よかったです。

せなら、ダリオはやさしいがらです。カフートというゲームをしたり、ハンギングコンテストをいっしょにします。

ぼくのせんせいのなまえは、ミス・ポットヴィンです。

すめがねをかけて、ゴールのまえにいます。

すのまえがみのけをしています。

カールしていてぼくはとてもそれを見て、どきどきします。

うくつみたいだとおもいます。ぼくのおもちゃがはいれそうです。

　せんせいは、よいことをするとチェックをテーブルにくれます。チェックがニ十こあつまるとプライズをもらえます。ぼくのテーブルのまえは、口ケツツです。いま十六こあつまりましたのもと四こでプライズをもらえます。

です。

ぼくのすきなべんきょう

は、アートとジムです。ア

トは、えのぐをつかえる

からです。ジムは、はしれ

るからたのしいです。

二ねんせいは、イタリア

ごごをなららいます。イタリア

ごごでこんにちはは、チャオ

です。バイバイもチャオで

す。おもしろいとおもいま

す。イタリアのちずもみら

いました。ブーツのかたち
をしています。たのしいと
おもいました。
　二ねんせいは、かけざん
をならうとおもいます。た
のしみです。

アメリカの学校

W校　一年四くみ

まつ田えな

七月のおわりにアメリカのニューヨークにきました。いまは、アメリカの学校にかよっています。

あたらしい学校は、えいごがわからないので、まだなれていないです。ともだちにおしえてもらいながらやっています。

　このまえ、おんがくのじかんにきょくがながれました。
　「あっ、アルプスいちまんじゃくだ。」とおもいました。
　えいごがわからないので、わたしは手びょうしをしました。すると、クラスのみんなもいっしょに手びょうしをしてくれたので、うれしかったです。
　おんがくはえいごがわからなくてもできるんだ。」とおもいました。

ました。

　こんなこともありました。

じぶんのだいじなものをもってきて、クラスのみんなにはっぴょうするじかんがありました。わたしはえいごがかけないので、おとうさんにかいてもらった文をよういえでなんどもれんしゅうしました。そして、ゆうきをだして手をあげました。すると……あたりま

した。
そのときはとてもドキドキしました。
でもがんばって、文しょうをよみました。
ともだちにもらったかいがらと、おとうさんといっしょにつくったおりがみのりっぱうたいのはなしをしました。
よみおわったあとは、（はーい。）とおもい、おわりかとおもったらしつもんのじかんがありましたそれはえいごのできた。

る日本人のともだちにたすけてもらって、ここたえました。おわるといいきもちでした。

わたしは、えいごをがんばって、先生やクラスのともだちのはなしていることがきけて、いいたいことがいえるようになりたいです。

W校
一年三組
杜木花音

ひいおじいちゃん

「かのんちゃんは、いつかえるのかな。」

もう、なん回も、おなじことをきかれている。

「明日だよ。」

「明日」と言ったときがりなのに、もうあすれたのかな。

わたしのひいおじいちゃんは九十七さいです。車い

すにの　　ていて、ひとりで
歩くことはできません。見
ていて、たいへんそうだな
とおもいました。
ひいおじいちゃんに、あ
たあと、おとうさんがうら
いおじいちゃんは、むかし、
ひろしまに大きなばくだん
がおちたときに、そのばし
よにいたんだよ、というは
なしをきました。
これはばくだんで、たくさ

んの人がしんだそうです。

わたしはこわいきもちになって、「て、ひいおじいちゃんが生きていてくれて、ほんとうによかったとおもいました。

お母さんが、「花昔が元気に生まれてこられたのは、ひいおじいちゃんがせんそうのじだいも、がんばって生きぬいてくれたからだよ」と言いました。

ひいおじいちゃん、おばあちゃん、おじいちゃん、おばあちゃんのちがつながって、わたしが生まれたそうです。そのはなしをきいて、ひいおじいちゃんはすごいな、とおもいました。これからもずっと生きていてほしいです。